

経済資料協議会の思い出

船 山 康

(中央大学経済研究所)

1994（平成6）年7月、人事異動に伴い、私は偶然にも経済資料協議会（以下経資協と略）の事務局を任されることとなった。恥ずかしながら私はそれまで経資協なるものを知らなかった。そしてこれが全ての始まりだった。

それから翌年の北海道大学での総会まで、仕事も分からず苦しい日々が続いた。そんなくじけそうな私を支えてくれたのは、すぐに良き飲み仲間となった会員諸氏のフレンドリーな笑顔だった。

後任の機関（京都大学）も決まり、私は晴れ晴れとした気持で北大での総会に臨み、懇親会の席上、酒に酔っていい気分で、「私の座右の銘は、まず他人には寛容に。その代り自分にも寛容にすることあります」などと挨拶した。これがどっと満場の笑いを誘ったので、調子に乗った私は、このネタをそれから何回か使わせていただいた。その度に笑って下さった皆様にお礼を言いたい。

結局、経資協とのお付き合いは14年続いたが、思い出すのは、経資協の意義でも存在価値でもなく、まず楽しい飲み仲間の顔、それから楽しい出張である。総会、理事会、研究会、見学会といずれも新鮮で刺激的で勉強になった。さらにお目当てが夜の部だったことは言うまでもない（笑）。いろいろな街に行ったが、札幌、京都、小樽、は特に思い出深い。

さて、いよいよ事務局引き継ぎの日取りが決まり、京都に行った私は、昼食をとった店に大事な公印入り封筒を置き忘れた。京大に着いて「あれっ？公印が無い??」と気がついた。

公印がないと通帳が使えない。S氏に事情を話し、先ほどの店に戻ると、「ああ、これ？」と封筒に入った公印を渡してくれた。「これです！助かりました！どうもありがとうございました！！」

こうして親切な「餃〇の王将」の店長のおかげで、経資協は預金封鎖の危機を脱したのである。もしあそこで公印を紛失していたら…。今思い出しても背中が寒くなる。最後なので皆様に告白しておく。

経済資料協議会の思い出

長谷川 伸 三

(前大阪樟蔭女子大学教授・茨城大学名誉教授)

私は1972年6月から1991年3月まで小樽商科大学に勤め、助教授ついで教授として日本経済史を担当した。同時にその大部分の期間、同大学経済研究所員を兼ね、主に資料部を担当した。同研究所は研究施設でもなく、専任は助手1人、前半は上原香江子さん、後半は今野茂代さんだった。同研究所は経済資料協議会に加盟していたので、日常的には『経済学文献季報』の文献カード作成の点検を担当した。文学部出身の私は、経済学（特に近代経済学）・経営学・統計学等には詳しくなく、カードの点検のなかでも分類に苦労した。

毎年の経済資料協議会総会にはほぼ出席することができた。各地の大学や機関を訪問し、多くの方々と知り合いになれた。なかでも同僚の松田芳郎氏の紹介もあって、一橋大学の細谷新治氏と知り合えた。氏は当時一橋大学日本経済統計文献センターで、『明治前期日本経済統計解題書誌：富国強兵篇』（全5冊、1974～80年）のシリーズを作成し、刊行しており、そのバックナンバーを含めて頂きたいとお願いしたが、初期に刊行した分は在庫がなかった。このシリーズは手元にあり、資料文献目録とその解題はかくあらねばならないと思っている。

私は1988年3月下旬から1989年8月中旬まで、文部省在外研究員として（後半は私費）ロンドン大学アジア・アフリカ研究学部